

袋井市立袋井東小学校 栄養教諭 小林 美穂子

《受賞分野：特に優れた実践（児童の興味関心を高める給食指導）》

新型コロナウイルスの感染拡大により、給食時間の様子が大きく変わりました。完全給食の提供が難しい時期や、黙食が推奨されたことにより給食時間に子どもたちの様子を見に行くことさえ、ためらうような状況にありました。そのような中でも、給食時間を楽しく過ごしてもらいたい、給食に関連した食の指導を行いたいと思い、給食時間の指導の在り方を考えました。

給食時間に行っていた指導は、朝活動の時間を活用し行いました。その日は、給食時間にも学級を訪問し、配膳や食べる様子を参観することで、給食時間に多くのことを話さなくても、食べている給食が教材となり指導することができました。また、食べている様子をじっくりと見る時間ができ、食べ方が上手な子や頑張っている子、食べ方の指導が必要な子へ個別に声をかけることができるというメリットもありました。

また、黙食により笑顔が少なくなった給食時間が、楽しいものになって欲しいと思い、給食に合わせた視覚的な資料を作成しました。タブレット端末が導入され子どもの ICT 環境が整ったことで、今まで提供していた教師用の指導資料にはない、絵や写真・動画を活用した資料を作成しました。食材の栄養や調理風景、地場産物の紹介、地元農家の思い等子どもたちが興味をもって視聴できる内容を工夫しました。「楽しみに毎日見ている」という声も聞かれるようになり、とてもうれしく思っています。今は、給食時間の会話を楽しむことができるようになりました。今後も、給食時間の会話が弾むよう、楽しみながら子供たちの食への興味関心が高まるような食育資料の作成を続けていきたいと思います。



日々の給食に合わせた ICT 資料

富士宮市立大富士中学校 教諭 山崎 舞

《受賞分野：特に優れた実践（ICT 機器を活用した授業づくり）》

私は市内の保健体育科の研修を推進する立場として、特に「ICT 機器の活用による『個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実』」を目指した授業づくり」に重点をおいて実践研究に取り組みました。



バトンパス練習を撮影している様子

リレーのタイムを縮めるバトンの受け渡しについての授業では、導入の段階で、チーム毎に考えまとめた「よりよいバトンパスの特徴」を、タブレット端末を活用して、他チームと共有する時間を設定しました。生徒は、他のチームの考えと比較することで考えを深め、自分たちのチームが理想とするバトンパスの方向性を明確にして主体的に活動に臨むことができました。また、タブレット端末の録画機能を活用してチームのバトンパスの動きを撮影し、自分のバトンパスの細かな動きを確認する場を設けたことも、協働的な学びにつながりました。

バドミントンのドロップショットの有効的な活用法の授業では、授業開始時に見せたドロップショットの動画を常に再生しておき、理想のショットの形を常時確認できる場を設けました。一方、タブレット端末のカメラ機能にある遅延再生装置を用いて、自分や仲間の動きを客観的に見られるようにすることで、自分の課題を把握したり、修正点を意識したりすることができました。くわえて、動画を見ながら仲間の助言を受けて視覚的に問題点を確認し、それを克服する練習を仲間と重ねることで、個の課題がグループの課題となり、さらに個の学びの深まりにつながる、いわゆる個別最適な学びと協働的な学びが往還する学びにつながりました。

この2つの実践から ICT 機器を効果的に活用することで、生徒たちは「個別最適な学び」から「協働的な学び」へ、さらには「個別最適な学び」へと必要感を感じながら、学びを進めることができました。

そして、この2つの学びの往還は、「楽しく充実した学び」になることを指導者である私はもちろん、生徒たちも認識することができました。

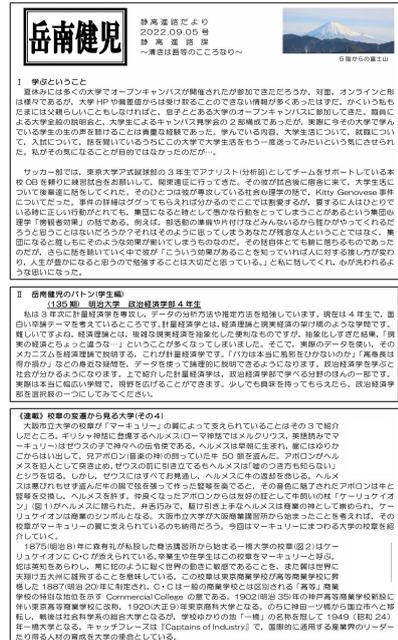
今後は、ICT の効果的な活用場面や活用方法についてさらに研究し、従来のノートや対面での学び合いの良さも生かしながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、生徒の資質・能力を高めていきたいと考えます。

《受賞分野：特に優れた実践（進路意識の高揚のための取り組み）》

静岡高校では生徒全員が大学進学を希望しており、生徒はもちろん、保護者も教員も大学受験を通過するためのノウハウに目を奪われることはよくあります。私は進路課長として、何を学びに大学に行くのか、それならこの大学に行くのか、将来どのように社会に貢献していきたいのかなど、自分のキャリアについて考えるきっかけ作りに取り組んできました。

進路課長を引き受けてすぐに、部活動で交流のあった進路指導のベテラン教員の所へ足を運び、進路課長としての心構えや先輩が行った取り組みなどをご教授頂きました。その一つが進路だより(右図)です。その中のコラムでは、令和3年度は大学の歴史を、4年度は大学の学章をテーマに大学紹介を行いました。単なる大学紹介が目的ではなく、生徒の大学に対する見方を広げさせることを狙っています。また、同僚との何気ない会話の中から始まったのが、「岳南健児のバトン」という卒業生によるリレー形式のコラムです。社会人編と学生編の2本立てで、職業や大学の紹介を寄稿して頂いています。また右図の進路だよりの中で紹介されているように部活動では、遠征先に大学生を招き大学での学びを後輩に伝えてもらったり、他県で文武両道を実践している高校と合同合宿を行い、昨日の自分を少し越えられるような仕掛けを取り入れたりしています。詳しくは学校HPの部活ブログをご参照ください。

以上のように私の取り組みの多くは人との繋がりによって支えられています。私自身はいつ、何を、どのように発信するかを考えているだけです。多くの人と繋がることで私自身も知らなかった世界をたくさん知ることができるようになります。これも同僚の受け売りですが、【現状維持は退化】をキーワードに今後もブラッシュアップを続けていきます。



進路だより【岳南健児】

静岡県立袋井特別支援学校 教諭 池田 志保

《受賞分野：特に優れた実績（大規模校における学年主任と連携した学部運営）》

私は小学部主事として、学年主任と連携した風通しの良い学部運営に取り組みました。

小学部の職員は、約70人と大人数で経験年数も様々です。授業の参観や先生方とのコミュニケーションを心掛け、風通しの良い学部を目指していますが、学年の詳しい現状や先生方一人一人の様子を把握することは、難しいのが実状です。

大人数だからこそ、全員が同じ方向を向き、共通のビジョンをもって教育活動を進めていくことが大切になります。部主事からの一方通行にならないよう、学部の先生方一人一人に伝える、広げる、そして想いを吸い上げるために、どうしたらよいかを考えました。

その中で、大事な橋渡しとしての役割を果たしてくれるのが学年主任、肢体主任です。まずは、年度初めに学年主任が作成している学年経営案の書式を学部経営とのつながりが分かるものにし、学部の目標を受けた学年の目標、具体的な取り組み方法を明記するようにしました。学年の経営方針が明確になると共に、他の学年の取り組みを知ることができ、学年主任の学年運営力の向上にもつながっています。日々の指導や授業準備などで忙しい中ではありますが、学年会等で定期的に経営案の振り返りをする事で、学部職員一人一人が必然的に学部経営に関わる事ができています。先生方一人一人の疑問や意見なども拾いやすくなりました。また、学年主任一人一人と学年運営などについて話をする時間を意図的につくりました。普段からは分からない学年主任の働きや児童、職員のことを情報共有することができ、学部運営に役立てることができました。

今後も、学年主任とのつながりを大事にすることで、学部の先生方一人一人との風通しを良くし、学部のまとまりを図っていきたいと思います。



小学部が一つにまとまって取り組んだ運動会